

Title	<紹介>荒木浩著『徒然草への途ー中世びとの心とことば』
Author(s)	勢田, 道生
Citation	語文. 2017, 106-107, p. 178-179
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70994
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

荒木浩著『徒然草への途――中世びとの心とことば』

勢田道生

上に孤立した作品であるようにも見える。史上に位置付けるのは、容易ではない。『徒然草』は日本文学史までもない。しかし、きわめて個性的で魅力的なこの作品を文学までもない。しかし、きわめて個性的で魅力的なことは、言う

りに紹介する。 りに紹介する。 で、本書の論点のいくつかを、稿者な本書各章の標題を示した上で、本書の論点のいくつかを、稿者な中心は、副題の通り、「中世びとの心とことば」である。以下、中心は、副題の通り、「中世びとの関係から解き明かす。問題のなぜ『徒然草』はそこに生まれたのか。本書はその必然を、

序章――本書へのいざないと展望

〈補論〉その一 「ものぐるほし」について第一章 心に思うままを書く草子―徒然草とは何か

その二「硯にむかふ」女

その三 兼好と「小野」

第二章 心に思うままを書く草子

〈やまとうた〉から〈やまとことば〉の散文史へ

第三章 徒然草の「心」

第四章 徒然草と仮名法語

第五章 ツクモガミの心とコトバ

第六章 和歌を詠む「心」

第八章 沙石集と〈和歌陀羅尼〉説―文字超越と禅宗の衝撃第七章 和歌と阿字観―明恵の「安立」をめぐって

第十章 『徒然草』というパースペクティブ 第九章 仏法大明録と真心要決―沙石集と徒然草の禅的環境

第三章、第四章、第九章)。 における「心」の本書の中心となる論点の第一は、『徒然草』における「心」の問題である。そもそも「心」はどこにあるのか。現代人は把握の問題である。そもそも「心」はどこにあるのか。現代人は把握の問題である。そもそも「心」はどこにあるのか。現代人は不動な文脈では、「心」は自己の外部から来るという言説が存し、されて「鏡」の比喩を伴い、その心の「鏡」に「妄心」であると同ような文脈では、「心にうつりゆく」ことは「妄心」であると同ような文脈では、「心にうつりゆく」ことは「妄心」であると同ような流れの上に『徒然草』が発生する必然が見出されるのだが、うな流れの上に『徒然草』が発生する必然が見出されるのだが、方な流れの上に『徒然草』が発生する必然が見出されるのだが、著者はそこに至る道筋を、日本における禅の受容、特に『仏法文』における「心」の本書の中心となる論点の第一は、『徒然草』における「心」の本書の中心となる論点の第一は、『徒然草』における「心」の本書の中心となる論点の第一は、『徒然草』における「心」の

ない。むしろ、散文としての『徒然草』は、為兼歌論の裏返しの好は、為兼を批判する二条派の枠組みを、和歌においては逸脱し好は、為兼を批判する二条派の枠組みを、和歌においては逸脱しば、登をを引いだす」のは和歌の領分であったはずであり、第二は、和歌と散文の問題である。歌人兼好にとって、心に思第二は、和歌と散文の問題である。歌人兼好にとって、心に思

ての『徒然草』に至る道筋を示す(第二章)。て、心に思うままを「やまとことば」によって記す「散文」として、心に思うままを「やまとことば」によって記す「散文」とし撰家集に記される編纂方針から、「やまとうた」の枠組みを超え撰。ないに浮かび上がることが示されるのだが、ここで著者は、兼好ように浮かび上がることが示されるのだが、ここで著者は、兼好

らには 自 た上で、「〈顕密・禅宗〉 尼説について、先行研究の整理を通じてその多様な流れを確認し て和歌と阿字観との関連の問題が詳論され、第八章では和歌陀羅 お関連して、第七章では、特に明恵著作や『沙石集』を材料とし ゆるものを映し出す『徒然草』が発生したとする(第六章)。な つりゆく」外部に向かい、そこに、「心」の枠組みを脱してあら の一方で、このような「内」の悟りへと向かうベクトルに対し、 想によって「悟り」への道としての正統性が付与されたこと、 『徒然草』はその起点を共有しつつも、そのベクトルは「心にう [の和歌陀羅尼説を位置付ける さらに問題は唯識論へと連なり、『撰集抄』や中世古今注、 和歌は、外界のすべてのことがらを心の所産とする唯識的思 『沙石 ·集』の和歌観から、「心に思ふこと」を「言ひ出だ 兼学」によって創出された『沙石集』独 そ さ

近づき、そこに自照性への道が開かれることを指摘するとともにスタイルは「謙遜」の外的要因を狭めてゆくと〈反古・手習〉に条件となる外的要因を排除していること、その一方で「謙遜」の子』跋文を踏まえ「謙遜」のスタイルに類似する序段は、謙遜の第三は、『徒然草』という散文の表現方法の問題である。『枕草

ていよう。 である。本書をどう受け止めるのか。 ら「中世びとの心とことば」の枠組みが鮮やかに描き出されるの みにあるのではない。本書では、さまざまなテクストの関係性か が本書の本領であると、稿者は考える。 鮮やかに位置付けられる。その問題意識の大きさと論理展開こそ で膨大なテクストが提示され、それらは明確な問題意識のもと、 途」を明らかにするものである。 とにはならないだろう。本書は標題の示すとおり、「徒然草への のいくつかを紹介したが、これだけでは本書の本質を紹介したこ 象徴される兼好ならではの視点を獲得せしめたとする(第十章)。 ま」体験を挙げ、このことが「よそながら見る」ということばに た要因の一つとして、「あづま」に関する章段の分析から 草子』と『徒然草』との関係の詳細な分析から、『 イルと『徒然草』とのつながりを解明する(第一章)。また、 に代表される、他者の目を想定しない「手習」という和歌の ることを指摘するとともに、このような視点を兼好に獲得せしめ 『枕草子』を念頭に置きつつ、その視点の相違を強く意識してい ・硯に向かふ」というキーワードの分析から、 以上、『徒然草』を直接的対象とする章を中心に、本書の論点 『徒然草』を中心として、 後進の責任も、 問題は『徒然草』 『源氏物語 また問 『徒然草』は 自体の の浮舟 われ スタ

勉誠出版、二〇一六年六月、四四〇頁、七、〇〇〇円+税)

(せた・

みちお

本学特任講師

(常勤))

70